
恋愛は強くないと得ることはできない

翔太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛は強くないと得ることはできない

【Nコード】

N6143Y

【作者名】

翔太

【あらすじ】

特には恋愛系物語。

だが、ときどきギャグや戦闘などもでてくる。

2年生になる前の話

僕は安田拓也、中学2年生で桜道中学校に通っている

1年生の時は毎日が何もない生活だった・・・

だが、2年生からはもっと不思議なことが起こるかもしれない

（まあ、起こるかはわからないけどね・・・

俺っていったほうがいいかなあ・・・）

「それにしてもねむいなあ・・・」

俺は今芝生の上に寝転がっていた
すると・・・

「おはよう！安田君！」

「ん？ああ、おはよう・・・」

今、あいさつをしてきたのは1年の時同じクラスだった
んーっと名前なんだったっけ？

ああ、思い出した！宮川裕子だ！

「おはようございます・・・」

「ああ、おはよう・・・」

このおどおどしている子は古川優奈さん

俺は1年の時から女子たちに

「告白しろ！」

と言われたので告白したらOKしてくれたので
付き合っている

いちおういっておくが今は春休みだ

「なんのようだ！宮川？」

「古川さんがお前みたいなクソ野郎に弁当を
持ってきてくれたんだぞ！

感謝しろよな！」

「ああ、古川さんありがとう・・・」

「い・・・いえどういたしまして・・・」

古川さんは少し喜んでいた
俺はちよつと顔を赤くした

「では・・・いただきます！」

俺はそう言った後、朝飯や昼飯を喰ってなかったので
かなりのスピードで食べた

「むーおいしいよこれ！ありがとう、古川さん！」

「どういたしまして！」

そうして俺はかなりの量があつた弁当をたつた5分でたいらげた

「ふう．．．。おいしかった」

「ありがとう．．．拓也君。」

（ん？いま名前で呼ばなかったか？）

「俺も名前で呼んでいいかな．．．」

「い．．．いいですよ！全然！」

古川さんは顔が赤くなっていた

「じゃあ．．．優奈．．．さん」

「お！これはいいムードになってきたので私はしつれいします！」

「ちよっ．．．おい！」

といって宮川は帰って行った

「．．．」

「．．．」

「送って行ってやるよ歩くの疲れるだろ？」

「えっ？いいんですか？」

「うん。いいよだって俺たち付き合っているんだし．．．」

ちよつと俺は顔が赤くなっていた

優奈さんも顔が赤くなっていた

「ではお言葉に甘えて・・・」

そう言つて優奈さんは後ろに座つた

乗つたら俺は自転車をこぎ始めた

「明日は学校だな」

「そうだね」

「一緒に行くか？」

「えっ！？いいんですか私なんかと・・・」

「いいに決まつてるだろ。」

優奈さんかわいいし・・・」

「では、明日私が迎えに行きますね」

「うん、わかつた」

その話が終わつた2分後に優奈さんの家に着いた

「では、また明日」

「また明日・・・」

そう言つて俺は自宅に帰つて行つた

「ただいま」

俺の家には誰もいない・・・

親も親戚も・・・

だから、バイトの許可とかも出ている

俺は帰つたら5分で風呂に入りすぐ寝ている

（俺の家には予算がある

だから、あと2年は大丈夫だろう・・・

優奈さんのご飯おいしかったなあ・・・）

そう思いながら俺は寝た

2年生になる前の話（後書き）

感想どしどし送ってください！

とつぜんの出来事

言っておくが俺は小学生の時、喧嘩に一度も負けたことがない

「ふあゝ・・・」

俺は起きて窓を開けると晴れだった。雲ひとつなかった
下を見ると古川さんがいた

「おはよう、古川さん！」

「おはようじゃないよゝ！」

早くしないと遅刻しちゃうよゝ」

俺は後ろを向いて振り向いて時計を見ると8時15分だった

「やべっ！」

俺は急いで制服にきがえて優奈さんと二人乗りをしながらいった
すると

「なんですかあれ？」

俺が前を向くとその魔法陣みたいなのが光って
吸い込まれていった

「うわああああ！！！！」

「きゃああああああ！！！！！」

俺たちは悲鳴をあげながら吸い込まれていった

「ん・・・ここは・・・どこだ？」

気がつくに変な町にいた

となりを向くと優奈さんがいた

「おい！優奈！大丈夫か？」

「ん・・・うん大丈夫ここはどこ？」

「おれも分からない・・・」

俺たちが考え込んでいると前から男の人達が10人くらいきた

とつぜんの出来事（後書き）

学生なので投稿が未定になりますのでよろしくお願いします

襲撃

「誰だお前ら？」

「誰なの？」

そう質問すると

「お前たちみたいな生きてるやつは殺しておかないとな」

「何言ってるんだお前ら？」

そう言った瞬間いきなり襲ってきた

「うわっ!!」

「優奈!下がってる!」

「は、はい!」

だが俺は一瞬焦っただけですぐに冷静になった

そして喧嘩の時の感覚を思い出しながら一人一人相手を蹴散らしていった

だが

「ぐはっ!」

後ろから木の棒みたいなので叩かれた

「大丈夫ですか！拓也君！」

その瞬間5人くらいの男たちが優奈のほうに向かって襲っていった

「やめろ〜！」

俺はかろうじて優奈をかばった

「だ・・・大丈夫か？」

俺は頭から血を出していた

優奈は気を失っていた

けどすぐに目が覚めたみたいだ

「うん・・・大丈夫

あと6人敵がいるから頑張って！」

そう言っつて優奈が唇にキスをしてくれた

「お・・・おい！いきなり何すんだよ！？」

「それじゃあがんばってね・・・」

そう言っつて優奈は目を閉じた

息はあるようだ

その瞬間

（優奈がキスしたら急に力が！！！！）

気がつく俺から明るい光が出て傷を治していた

「まさか・・・こいつらは!?!」

敵が驚いた顔をしていた

「よしっ!いくぜ」

そう言つて30秒後には敵を瞬殺した

「ふう・・・こんなもんかな」

(なんで優奈つてこんなに優しいんだろう・・・)

「まあ考えても無駄だ

さっきの奴らが来る前に町みたいなところに行かねえと・・・」

そう言つて俺は優奈を背負つて歩きだした

町

「ふうゝ・・・」

おれはため息をついていた

なぜならやっと町に着いたからである

かかった時間は約40分・・・

そのあいだ優奈はずっと寝ていた

「まあ、そんなことはどうでもいいとしていくか！」

そう言つて町に入つた瞬間あの男たちに足を撃たれた

「うつ！」

俺は倒れそうになったが何とか持ちこたえ急いで家の中に逃げ込んだ
偶然そこは空き家だった

「くそっ！銃を使うとかせこいだろ！反則だろ・・・」

まあこんなこと言つてどうにかなることじゃないけどな」

そんなことを言つてると

「ん？あ、拓也君おはよう」

優奈が起きたようだ

「ああ、おはよう」

「ここはどこ？」

「家の中だ。安心しろ
誰もいないから大丈夫だ」

「うん！わかった」

雑談をしてると

「お客かい？」

「おや？君たちはカップルのようだね」

「うわっ！」

「きゃあ！」

「そんなにびつくりされたら困るよ

「あ、言っておくけど私はあいつらの仲間じゃないからな」

「ああ、わかってる」

「ま、そういうことは置いて君たちは恋人同士かい？」

「はい」

「ああ」

「ならまず・・・」

といった瞬間その女性は俺たちの後ろにいた

「キスをするべきだな!!!」

そついった瞬間無理やり俺と優奈はキスをさせられた

「お・・・おい！お前なにすんだよ！」

「はうぁ・・・」

「女の方は衣装になって男の方は光が出てるだろ！」

「ほんとだ！」

1回優奈にキスされた時もこんな感じになったんだ！」

「ドレスになってる・・・」

優奈は嬉しかったらしい

さてここからが本当の説明だ

そつ言つて女は真剣な表情で話し始めた

町（後書き）

なんかギャグが入れねえー！！！！
みなさん感想どしどしおくってください^^

衝撃の話

「では、言っぞー!」

「ああ」

「お前たちは今からずっと手を握っていかないとイケない」

「!!!!」

「う・・・ウソだろ・・・」

「そ・・・そんな・・・」

俺と優奈はかなり驚いていた

「まあ、そういうことだ」

「おい!そういうことって何だよ!」

「だから!お前たちが手を離して15分たつと・・・」

「たつと?」

「死ぬ」

「!!!まじかよ・・・」

「おい！一つだけ教えてくれよ
お前情報屋なんだろ！」

「なぜ私が情報屋だと？」

「あ、いや、なんとなく・・・」

（こいつ、もしかして）

「まあ、いいだろう
何だ一つだけ教えてほしいとは？」

「私たちが手を離しても良くなるには
どうすればいいの？」

「この世界にヘルストーンというのが
3つある。それを全部持つてきて
最初にいた場所に置けば元の世界に戻るだろう」

「わかりました！
ありがとうございます」

「ありがとう！
なら早速いくか優奈！」

「はい！」

そう言って俺と優奈は行こうとした

「あ、まて

「これをもつていけ」

そう言った女性は地図みたいなのをくれた

「赤い印が付いてるところにあるからな」

「ありがとう！」

「絶対死ぬなよ・・・」

そう言つて女性は消えた

「よし！行くか」

「はい、でも手をつないでるのが
当たり前に見えてるような・・・」

「あたりまえじゃねえよ
だって俺たち顔赤くなってるし・・・」

「そうですね・・・
まあいきましょうか」

「ああ！」

そう言つて俺たちは歩きだした

衝撃の話（後書き）

なんか分かりにくいので次から出来れば人の名前を横に書こうと思います^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6143y/>

恋愛は強くないと得ることはできない

2011年11月30日23時52分発行